埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

Physical Expression Triggered by Art Activities : Proposed Activities for Children and Expression

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2022-02-18
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 木谷, 安憲, KIDANI, Yasunori
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1387

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

造形的表現をきっかけにした身体的表現
――「子どもと表現」での活動案――

木　谷　安　憲

Ⅰ　はじめに

平成 30 年度実施幼稚園教育要領では，「5 領域に示す教育内容に関する専門知識を備えた専門性と，5 領域に示す教育内容を指導するために必要な力，具体的には，幼児を理解する力や指導計画を実践していく力，様々な教材を必要に応じて工夫する力等の実践力の二つの側面から見ていく必要」があるということで，「領域及び保育内容の指導法に関する科目」が創設されることになった。本学でも，領域に関する科目が新設されることになり，保育内容（表現・造形）を担当している筆者は，「子どもと表現」を担当する予定になっている。そこには造形や音楽はもちろんのこと，身体的表現も含まれている。子どもは歌いながら，動いたり絵を描いたりを自然にするものなので，身体的表現と音楽的表現や造形的表現が厳密に区分されているわけではない。それでも，造形的表現と身体的表現は，身体的表現と音楽的表現や音楽的表現と造形的表現の組み合わせに比べると，書籍などで例示される例が少ないように感じる。そこで本稿では，造形的表現をきっかけとした身体的表現の活動について，「子どもと表現」の時間にできそうな実践を行い，結果を考察した。

Ⅱ　保育内容（表現）の中の身体表現

1. 保育内容における表現について

平成 30 年 4 月より施行された幼稚園教育要領，保育所保育指針，幼保連携型認定こども園教育・保育要領には，幼児期の終わりまでに育ってほしい「10 の姿」があらわされた。それは，幼児期の終わり，すなわち小学校入学までに育んでほしい姿や能力のめやすである。その 10 番目には「豊かな感性と表現」があげられ，「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で，様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き，感じたことや考えたことを自分で表現したり，友達同士で表現する過程を楽しんだりし，表現する喜びを味わい，意欲をもつようになる」と示されてい

る。

心を動かす出来事とは，大きなものだけとは限らない。むしろ日常生活の中にある小さなことにも心を動かすことのできる感性を持とう，と言いたいのではないか。その中で素材とは，描画材料であり制作の材料であり楽器であり楽譜であり自分の身体などのことを指している。その素材のことをよく知ることで，表現するための生かし方が分かってくる。生かし方を工夫することが，表現のプロセスにもなる。表現する過程を楽しむことで，さらに表現意欲も増していく。また，感じたこととは，ある意味で直感的なことであり，考えたこととは，なんらかの時間が経過したことを示している。表現するためには，その両輪が必要であろう。また，表現するには他者の存在も欠かせない。他者がいることで表現になることもあるだろうし，意欲を増すこともあるだろう。いずれにしろ保育者は子ども達の表現をうまく受け止め，うまく促していくことが必要になってくる。

表現について平田智久（2019）は,「表」と「現」に分けて説明する。表すは，意志を示し，現れるは,「人の内的な身体的にも心情にも無意識だけど，表情から見えてしま」い,「表情や発した音を感じ取れる人と感じない人とでは，その子どもとの関係は大きく異なり」,「つまり『表現』とは『感じ取ってくれる人』が絶対に必要」[(1)] という。また，感じ取ってくれる人によって，表現する側の質まで変わることは往々にしてある。つまり，その子どものことをよく観る保育者と，その子どもに対してあまり関心を示さない保育者とでは，子どもの表現に違いが出てくる，ということを想定している。いずれにしても子どもの表現とは，楽しむこと，その過程を大切にすることはもちろんのこと，受け止めてくれる人がいてこそ意欲がでてくることがわかる。

2. 子どもの身体表現について

子どもの身体表現とはどのようなものか。佐橋由美（2019）は，乳幼児期における表現活動に関係する遊びについて，しぐさや行動を真似し再現する遊びは,「ふり・見立て・つもり遊び」から「ごっこ遊び」「役割遊び」へと，音楽や絵本，物語，お話を楽しむ遊びは,「受容遊び」から「パフォーマンス遊び」へと，物とかかわる遊びは,「感覚遊び」から「構成遊び」へと，それぞれ発達するという[(2)]。造形的表現をきっかけとした身体的表現の活動の可能性を探る際，子どもが楽しめるよう発達段階に応じて適切な活動を行なっていかなくてはならない。またこれらの視点を持っていれば，提案する活動を,「ごっこ遊び」よりも「役割遊び」に近づけよう，などのアレンジを加えることもできよう。

高原和子（2020）は，動きに関する３つの要因を示している。「時間要因には，『速度の変化』『リズムの変化』『拍子の変化』」が,「空間要因には『方向の変化』『高さの変化』『面の変化』」が,

「力性要因には,『強く-弱く』『緊張-解禁』『断続的に-持続的に』」があるといい,「子どもの動きを変化発展させるには，これらの要因を視点にした援助を心がけることが援助のポイントとなる」[(3)] いう。これらの要因は，子どもが身体的表現をしている場合にも常に意識しておきたい。例えば，動物になり切る活動だったとしたら，もっとゆっくり（早く）動いてみよう，あっちのほうに動いてみよう，もっと強く（弱く）動いてみよう，という提案ができるからだ。

3. 保育者養成の授業における身体的表現

新山・高橋（2014）は,「保育者養成における身体表現教育に関する研究の動向を，特に『即興』『身体』『授業実践（保育者養成・特に身体表現)』という 3 つのキーワードに基づいて関連する研究成果を整理」した。そして，今後取り組むべき実践及び課題を,「身体そのものや他者との関わりに由来する身体表現の特性に着目した研究をさらに進める」こと,「「限られた保育者養成カリキュラムの中で『何をどのように教えるか』という内容と方法の精査を行う研究が必要」[(4)] であると述べている。造形的表現をきっかけとした身体的表現の活動を考えるとき，即興的な動きを取り入れることは非常に大切になると考えられる。視覚的要素を動作に置き換える場合，楽譜から音を出したり，文字を声に出して読んだりするなどアウトプットの決められたルールがないからだ。ゆっくり考えてその結果動くことも可能ではあるが，子どもと行う活動であるから，やはり即興的な動きになることが自然であろう。

また，新山順子（2011）は，身体表現の授業では「リズムやイメージ，人との関わり関わりから動きが生まれる身体表現には，規則的な動きの縛りがなく,（中略）身体の非常に根源的なところで快を実感しやすい」という。授業の構成は「最初はイメージよりも動きが先行するように活動を組み立てる。イメージが先行するような主題，例えば何かを模倣するような活動は，授業が少し進んでから行う」。そして，多様性，創造性，コミュニケーションというキーワードが浮き彫りにされるような「他者と関わり合う自由な即興表現を授業の核としている」[(5)] という。確かに，いきなりイメージを作って動き始めるのは難しいかもしれない。そのためには身体の準備が必要だからだ。授業の前半では動きやすい活動からスタートするのがよいだろう。そして，身体の非常に根源的なところで快を実感できるような活動を行うことが，子どものためにも学生のためにも保育者のためにもなるだろう。

4. 造形的表現からはじまる身体的表現

それでは，造形的表現と関連した身体的表現を，子どもを対象とした例からみていきたい。そ

の際，本稿では，数日間に渡るような時間のかかるものや大量の材料を必要とするものは除外した。まずは学生や保育者が自分もやってみたいと思えるような，とっつきやすい活動を考えたいからだ。ここでは，絵から身体的表現につながるものを取り上げる。

まずは，本学を卒業して現在6年目の幼稚園教諭に紹介された，「おちた おちたカード」からみていく。「おーちたおちた なーにが 落ちた？ ○○が落ちた！」の遊びは子どもたちの言葉遊びの定番であり，学生もよく知っている。その遊びをもっと楽しめるようにと作成されたのが，この絵カードだ。保育者に向けてハンドメイドの商品を作っている，あゆ's shopの商品紹介サイトには「おちた おちたカード」について，「いつもはなかなか集中出来ない子どもの目がキラーン☺ 視覚からだと興味をそそられるようです。小さな子どもたちにも解りやすく遊びが楽しめます‼ 1分でも出来るし10分でも集中出来るのは視覚からの訴えがあるから面白い！」(6) と書かれている。カードの枚数が多いとはいえ保育者は自分でも作れる絵カードだろうが，3年間で700人の保育者に購入されたようなので，現場での需要はあるのだろう。これは絵から身体的表現につながる例であり，言葉だけよりも絵があると伝わりやすいというものだ。

次に絵本関係の実践である。徳嵩博樹（2014）は，たにかわしゅんたろう作，もとながさだまさ絵，『もこ もこもこ』(7) の読み聞かせをきっかけにした身体表現ワークショップを提案している。擬態語と抽象画を組み合わせた絵本の読み聞かせが終わった後，「4〜5人を目安にグループに分かれて，表現したい場面を二つ選ぶ」「決まった場面の表現を擬態語に合わせながら表現する」「ページ順に発表する」「最後に全員で『もこ』を発表して感想を発表する」(8) という流れである。実践の紹介からは，子どもたちの楽しそうな様子が伝わってくる。擬態語，抽象画，身体的表現という組み合わせは，非常に相性のいい組み合わせだと感じる。こちらは絵そのものから，言葉を間にはさんで身体的表現につながる例である。

以上，2つの例を取り上げた。1つ目は，動きを指示するイラストカードをきっかけとして身体的表現にしていくというもの。2つ目は，擬態語，抽象画をきっかけに身体的表現にしていくというものである。どちらも言葉が関与している。これらのことを参考にしながら実践につなげていきたい。

なお本稿では，描いたり作ったりすることができる表現や，形や色などの要素がある表現を造形的表現とよび，動いたり演じたりする表現や，身体を使う表現を身体的表現とよぶ。

Ⅲ　アートと身体的表現

造形的表現をきっかけにする身体的表現ということで，ここでは保育内容から離れて，アートの文脈から身体的表現についてみていきたい。中村英樹（2013）は，パフォーマンス・アートに

ついて「人間の身体とその動きを主な媒体として美術家などによって時間的な経過とともに行われる表現である。（中略）身体的な行為や肉体・物質の特性に重点がおかれていて，非言語的な性格が強く表われ，一義的な意味に還元できないメタファーの様相が顕著である」[9] と述べる。ただ，パフォーマンス・アートの意味は時間の経過とともに拡大したり変化したりするので，定義者自らが自分の文章に疑問を投げかけながら進めることも少なくない。

また中村は，パフォーマンス・アートを代表する作家として有名なドイツ人アーティスト，ヨーゼフ・ボイスを写真入りで取り上げている。ボイスの「私はアメリカが好き，アメリカも私が好き」というパフォーマンスは，「ドイツからアメリカの会場へ飛行機で向かい，空港と会場間の往復，アメリカの白人社会から隔離されて救急車で運ばれ，アメリカインディアンを象徴するコヨーテとのやり取りにだけ集中し，他者的でありかつ共存的である相互関係を際立たせようとするものだった」[10] と説明する。ボイスは，先住民に対するアメリカ社会の抑圧を批判している，といわれているしそれが定説になっているのだが，文脈を読み解くことができなければ，よく分からないことをしているだけ，という解釈になってしまいかねない。しかし，パフォーマンスを見てもおらず，文章を読むだけでも，何か不思議な余韻が残るのはボイスのパフォーマンスの力だと感じる。

2010 年 3 月 14 日から 5 月 31 日まで，ニューヨーク近代美術館で，マリーナ・アブラモヴィッチのパフォーマンスを再現する回顧展が開催された。「これは MoMA の歴史においてパフォーマンス・アートに最大の展覧会である。展示期間，アブラモヴィッチは 736 時間 30分，沈黙のまま，訪れる鑑賞者と椅子すわって向かい合うパフォーマンス『The Artist Is Present』を行った」[11]。筆者は偶然，そのアブラモヴィッチと誰かが向かい合わせになって，一日中座っているパフォーマンスを見ることが出来た。黙って座って向かい合っている 2 人を，観客はただ見るだけである。ただ見るだけなのだが何とも言えない緊張感と，没入感を感じることができた。この向かい合わせになってお互いを見つめ合うパフォーマンスをやるとしたら，子どもだと飽きてしまうかもしれないが，学生達なら興味深い体験になるのではないかと思った。

東京都現代美術館では，「新たな系譜学をもとめて アート・身体・パフォーマンス」という展覧会が 2014 年に開催された。ダンス，能・狂言や歌舞伎などの伝統芸能，舞踊，演劇，スポーツ，武道，などが取り上げられている，「身体とパフォーマンス」をテーマにした展覧会だった。その中にジェリー・メーレテゥというアーティストがいてドローイングが出品されていた。チーフキュレーターの長谷川裕子（2014）は，「メーレテゥが身体性について語る言葉，『感覚による認識，あらわれる知覚可能な形態，感触，響き，耳，言語，感受，嗅覚，聴覚，消えない知識，予感…』は，知識や情報が，他の感覚と一体となる共感覚として溶解している現代的な身体知のありかたを示唆している」[12] という。水墨画風の大胆な筆致があり，点描やシャープな線などが

混ざり合う作品は，そこにいない作家の身体性を感じさせるものになっていて，まるで舞うための譜面のようにも感じる。だからこそ,「身体とパフォーマンス」をテーマにした展覧会で取り上げられたのだろう。

アートと身体的表現ということで，いくつかの例を見てきた。どれも一見すると保育における表現とは遠いように感じるかもしれない。しかしながら，在命中は常に時代の先端にいた画家ピカソが，子どものような絵を志向したように，これらのアートも子どもの表現と完全に隔たっているとはいえまい。むしろ，これらの中から小さくても何らかのヒントを見つけることは，子どもたちの身体的表現の豊かさにつながる活動が生み出せるかもしれない，といえよう。

Ⅳ　研究の目的

保育者が園でできるような，造形的表現をきっかけとした身体的表現の活動を考えることが本研究の目的である。どのようにすれば子どもが楽しめる活動にすることができるか，学生と行なった造形的表現をきっかけとした身体的表現の実践を通じて検証していく。造形的表現と身体的表現のつながりを考察するとともに，造形の教員として造形的表現をきっかけとした身体的表現の活動の可能性を探っていく。

活動案に関しては，保育者が身体表現に関して高い専門性を必要とするものは避ける方向で考えていく。高い専門性を必要とするものは，外部講師が園に来ていただいてワークショップなどをしてもらう方法があるからだ。いつも子どもたちと一緒にいる先生だからこそできる活動，多少の準備を必要としても，なるべく手軽にできる活動を考えていきたい。

Ⅴ　研究の方法

1. 対象

本学こども学科に令和２年度に入学した初等科教育図工選択者の学生，２年生６名。

2. 方法

令和３年９月22日の９時から10時半までの授業で,「保育内容（表現）にはあって，図工にはないもの。その１つが身体的表現」というテーマで，実践を含んだ活動を教員である筆者が学生に行なった。４つの活動を行い質問用紙で活動を行う前と後にアンケートをとった。これらによって造形的表現をきっかけにした身体的表現について，保育者の立場でどのような活動が考えられ，子どもにとって楽しいと思われる活動をどう作っていくか検討する。

3. 実践の概要

実際の授業では，4つの活動を行った。最初の活動は，動きやすいものから始めるということで，ウォーミングアップの役割を果たしている。後半の3つが造形的表現をきっかけにした身体的表現の活動である。それぞれ説明したい。

① 「あたま かた ひざ ぽん（感触を確かめる遊びに繋げる）」は，手遊び歌「あたまかたひざぽん」の最後の「め，みみ，はな，くち」のところで「つくえの うえ，するする～」や「きょうしつのかべ～，とんとん」など，素材の感触を味わう動きにつなげる。身近にある素材，例えはタオルや画用紙や木材などもこういった遊び歌の流れで感触を味わうと，いつもと違う感覚を味わえる可能性が高まるだろう。これは身体的表現をきっかけにして，造形的表現というより造形の時間に大切にしている感覚に触れるような活動になっている。

② 「まる さんかく しかく（形の要素を動きに取り入れる）で，なにつくろう？」は，遊び歌「ぐー，ちょき，ぱーで，なにつくろう？」の替え歌である。道具は使わず，身体のみの遊びである。「まる，さんかく，しかくで，まる，さんかく，しかくで，なにつくろう？ なにつくろう？ ちいさな まると，おおきな まるで，ドーナツ，ドーナツ」などの歌詞に合わせて2つの丸のポーズを交互にとる。「まる，さんかく，しかくで，まる，さんかく，しかくで，おでん～，おでん～」というアイディアも学生から出てきた。丸，三角，四角という基本的な形を想像しながら身体的表現につなげていくという発想である。これは造形的表現と身体的表現を同時に行う活動をきっかけとして，見立て遊びという造形的表現とよんでいい活動につながっている。

③ 「サイコロポーズ（絵に合わせたポーズをつくっていく）」は，4個のサイコロの各面に絵と言葉が描（書）かれており，その絵に合わせてポーズを作っていくという活動である（図1）。ちなみに今回使用したものはフエルトで作られている。サイコロは1個ずつ転がし，その都度ポーズを作っていく。例えば，最初に「ネコが」が出たら，みんなで猫のポーズをする。次に「あついところで」が出たら，猫が暑い（熱い）ところにいるポーズをとる。2個目くらいから，それぞれの個性的な動きが出てくる場合が多い。その次に「ブルブルしながら」が出たら，猫が暑い（熱い）ところでブルブルしている様子を演じる。暑いのにブルブルするのは，通常ならありえない光景なので，笑いが起きつつも，みな工夫しながらポーズをする。最後のサイコロで「じゃんぷします」が出たら，猫が暑い（熱い）ところでブルブ

ルしてジャンプする様子を演じる。意外な組み合わせの身体的表現になるのは，サイコロというどんな組み合わせになるかわからない仕組みのためである。これは絵から身体的表現につながる例であり，言葉だけよりも絵があると伝わりやすいというものだ。前に見た「おちた おちたカード」と共通する部分がある。

図 1　それぞれのサイコロの出た面と 4 つが組み合わされたところ

④ 「ジブリッシュ（抽象画を声と動作で表現する活動）」

ジブリッシュとは，「外国語を話しているように声の抑揚やスピードの間を変えてめちゃちゃ言葉をしゃべる」[13] というものである。ジブリッシュを行う演劇のワークショップもあり，検索すればネット上にはいくつもの動画がある。ジブリッシュはそれだけでも楽しいのだが，造形的表現をきっかけにするという研究なので，絵を描く活動を付け足している。まず，四つ切り画用紙にクレヨンで抽象的なドローイングをする。そしてその線を音声にするのだ（図 2）。色によっても，線の質や強弱や長さによっても，言葉は変化する。「じゅるぴろ　ふにゅりぬ　しゅしゅばりしゅしゅばり　くっ　て　て　てん　ろうるど　りりり～ぐす　さふうー」など，意味のない音声だけの言葉で話し，それに身振りを加えるという活動だ。まず自分だけで表現し，二人での会話，全員でのコニュニケーションへとつなげていく。途中からは，自分のドローイングだけではなく，会話する相手のドローイングから引き出された音声と身振りでコミュニケーションを続ける。こちらは絵そのものから，言葉を間にはさんで身体的表現につながる例である。これは前に見た，絵本の読み聞かせをきっかけにした身体表現ワークショップと共通する部分がある。

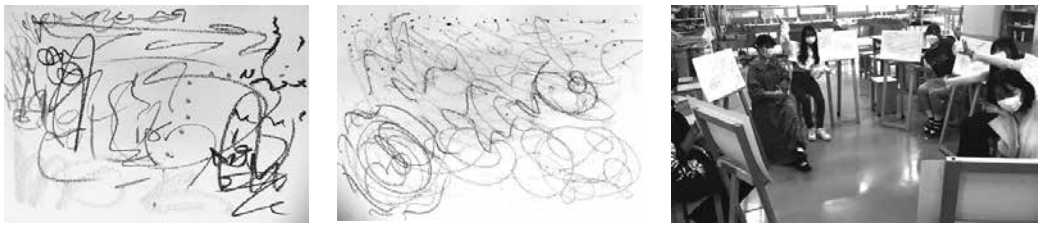

図 2　ジブリッシュのためのクレヨンドローイングと活動の様子

Ⅵ　アンケートの結果と考察

1. 学生への質問と感想（①～③は活動を開始する前に，それ以降の質問は活動後に行なった）

① 幼稚園，保育園，こども園での身体的表現というと，あなたはどういうイメージを持ちますか？

A. 運動会のダンス。B. 体を大きく動かしながら，簡単な動作の運動を使って自由に楽しみながら行うイメージ。C. ピアノに合わせて体を動かす。D. リトミック，体育，体を使って遊ぶ。E. 自由に楽しく動く。F. 鬼ごっこや遊具を使って，遊んだりすること。

音楽や体育を連想しているだけでなく，純粋に身体を動かすことをイメージする学生や，遊びと結びつけて考える学生もいた。幼稚園，保育園に実習で２～３回行っている学生なので，見たことと学んだことを合わせて考えている様子が伺える。

② あなたが実習で見た身体的表現にどういうものがあったか教えてください。

A. 組体操。 B. ◎朝の体操の時間 ◎リトミック（音楽に合わせて体を動かす）→動物になりきって踊る ◎朝の会での歌の時に動きを交えながら歌う。C. 英語の歌に合わせて円になって動く（立つ，座る，回る，広がる）。D. 体育，リトミック，まりつき，縄跳びチャレンジ。E. 動物の真似をして動く。F. 朝，園庭で自由遊びをする前に，園庭に広がり，音楽に合わせて体操をやってから遊ぶ。

体操以外では，動物の真似をするのを見たという学生が２人いた。これは保育者が活動を行いやすいし，子どもたちも楽しめるものになっているからだろう。リトミックも一般的に行われている身体的表現である。造形的表現と関連しているような身体的な表現の例は，ここにはなかった。

③ 造形的活動と関連させた身体的表現をするとしたら，どのようなことを大切にして，どんな活動をしますか？

A. 旗に何か描いたり，貼ったりしてオリジナルの旗を作り，それを使って運動会などでダンスなどの演技をする。ひとりひとりが自由に自分だけのオリジナルの旗をつくれるように，創造性を大切にしたい。B. 一曲音楽を聴いて，感じたままに絵を描いてもらうそれを元にしながら曲に合わせて自由に体を動かす。C. もの作ってそれを持って動く。D. 体を大きく使ったり動かしたりすることを大切にし，大きな紙に絵を描いたりする（自分の等身の絵とか）。E. 楽しく体を大きく動かす。F. 布を使い，体に巻き付けたり友達と引っ張ったりしながら，遊び色々な形を作る活動。

オリジナルな旗などを作って，その作ったものを使った身体的表現は面白くできる活動案であろう。音楽を聴いて絵を描いて，それを元に動きを作るのも興味深い活動になりそうだ。大きな紙に身体を大きく使って絵を描く活動も，布と身体を使って形を作っていく活動も，造形と身体を上手くつなげた表現だといえる。それぞれが優れたアイディアを出している。

④　授業で行った活動であなたが楽しかったものを選んで，その理由も書いてください。

A. サイコロポーズ．B. サイコロポーズ。何が出るかわからないサイコロからイメージして表現するのが楽しかったから。また，仲間と協力して絵を完成させるのも楽しかったから。C. サイコロポーズ →人とサイコロがあればできる，自分が出した目をみんなが表現してくれるから全員で楽しんでできる。D.【サイコロポーズ】なりきりづらいポーズも出てきたりして，難しい！楽しい！と思った。E. まるさんかくしかく : 様々な考えがあり楽しめた。サイコロポーズ：組み合わせにより体の動かし方が変わるから楽しい。F. サイコロポーズ 。ジブリッシュ。

サイコロポーズ（6 票），まるさんかくしかく（1 票），ジブリッシュ（1 票）だった。「サイコロポーズ」は，動きの指示が 1 つずつ増えて，表現を変化させるところが，学生には面白く感じていたようだ。

⑤　園児とやったら楽しそうなものを選んで，その理由を書いてください。

A. あたまかたひざぽん，サイコロポーズ。B. サイコロポーズ。自分がやって楽しかったものは子どもたちも楽しめると思ったから。C.・あたまかたひざぽん→子どもでも知ってるし，体があればできる。保育室に色んなものを置いておくともっとアレンジが広がりそう。D.【あたまかたひざぽん】ものを触って感覚を知るのもそうだし，少し遠くのものとかをタッチするときに走ったりするから子どもからしたら楽しいと思う。【まるさんかくしかく】大人がやるのと子どもがやるので発想が異なりそうだし，子どものほうがいろいろな『まるさんかくしかく』を探せそう。【サイコロポーズ】サイコロ振って矛盾したものが出てきたときにとても盛り上がると思うし，表現の仕方にも個性があって面白いと思う。E. あたまかた ひざ ぽん：走ったり歩いたり体を動かせたり，触れることの楽しさをあじわえる。サイコロポーズ：ダンス形式でやることが楽しいから。F. サイコロポーズ 。あたまかたひざポン。人それぞれの動きがあって，真似したりして楽しく遊べるからまた，年齢によって，まだしっかり喋れない子のいたりするのでとても良いと思った。

あたまかたひざぽん（5 票），サイコロポーズ（5 票），まるさんかくしかく（1 票）。3 つ選んだ学生もいたが，前の質問の自分が楽しかったものの中に 1 票も入らなかった「あたまかたひざぽん」が一番票を集めた。保育室に色んなものを置いておくともっとアレンジが広がりそう，と書かれているように，活動が想像しやすく自分なりに工夫できそうなところがあったからだろう。「サイコロポーズ」も同様に，自分も楽しかったし，子どもたちと楽しく活動する様子が思い浮かびやすかったのだろう。

⑥　授業の中で身体的表現について取り上げる時，どんなことに注意すればよいと思いますか？

A. 恥ずかしがらない，ひとつのことに囚われないで自由に考える。B. 子どもたちが楽しめるように簡単で行いやすく短時間でできるもので行うこと。C. 怪我をしたり道具が破損しないようにする必要がある。D. 子どもたちの自由な発想を使って，恥ずかしがらずに全力で行う。E. 子供の特性に合わせたものをやる（自由に表現できる）。F. 全員が参加できること。周りの友達にぶつからないようにする。

２人の学生が書いているように，恥ずかしがらないというのは，授業の中での留意点だ。子どもが目の前にいる場合は，反応してくれるので思い切って声を出せても，学生の前だと何となく恥ずかしいという声をよく聞く。それを回避する方法としては，まずは中心となる教員が，学生が恥ずかしい気持ちにならないよう，楽しい雰囲気を作ることだろう。

⑦　造形的表現と関連させた身体的表現をするとしたら，どのようなことを大切にしてどんな活動をしますか？

A. 思いっきり楽しむこと，自由に考えられること。B. 正解を決めずに自由に楽しくすると良い。C. 自由に体を動かせるように場所を確保しておく。D. 体を大きく使ったり，コミュニュケーションをたくさん取ったりすることを大切にして，自由に楽しく行う。E. 子供の発想・考えを大切にする。F. 子供たち全員が参加できるような活動にする

学生が意識したことは，自由ということ，楽しく行うということだ。身体的表現についてだけの質問をするよりも，造形的表現と関連させたことで，より自由と楽しさに着目したのかもしれない。

⑧　今日の活動の感想を書いてください。

A. 身体的表現と造形的表現の組み合わせのイメージが全くつかなかったけど，やってみたらすごく楽しくて，子どもたちと一緒にしたいと思いました。B. 身体的表現と造形はかけ離れてると思ったけど，造形を通じて身体的表現を行なったりすることは子どもたちにとってとても楽しい活動になると思いました。C. 子どもでも楽しめそう。D. 身体的表現と造形的表現の組み合わせがたくさんあることがわかった。自由に表現するすることがとても楽しかったです。E. 人数が少ないからこそ楽しいものがある，皆の意見を組み合わせて行う楽しさを味わえた。F. 教室の中をめいいっぱい使って動いたり，小さく動いて遊んだりして，とても楽しかったです。また，友達と今協力して，何かを作ったりすることで，コミュニケーションも取れてとても良いと思った！

筆者自身が，時間をかけて工夫して今回の授業に臨んでいるので学生の感想はよく分かる。それは，身体的表現と造形的表現の組み合わせについて，イメージが全くつかなかった，たくさんあることがわかった，というところである。身体的表現と造形的表現の組み合わせは，保育雑誌

などでもあまり取り上げられていないので，まずは今回のように知ることが大切ではないだろうか。

2. 実践の感想の分析と考察

学生にとっては，造形的表現と身体的表現を組み合わせて考えたことはあまりなかったようだ。しかし，③「造形的表現と関連させた身体的表現をするとしたら，どのようなことを大切にして，どんな活動をしますか？」のような問を与えられた場合には興味深い回答が出てきて，工夫次第では今後の授業で取り上げられそうなものもあった。実際の保育現場での表現活動を現実化する際に大切になるのは，身体的表現活動がどのように行われるかを想像する力であろう。活動のねらいを持つことはもちろんだが，子どもたちが面白く活動するポイントを見つける力やそれを感じ取れる想像力があるとよいだろう。

また，ジブリッシュに思ったほど表が入らなかったのは，筆者にとっては意外だった。活動中は，大きな声が上がり笑いも絶えなかったからだ。しかし保育という視点で考えれば，手遊びをベースにしている活動と比較して，馴染みが薄いといえよう。また，ジブリッシュを動きに結びつけにくかったのかもしれない。ただ，だからこそ上手く活動に取り入れることができれば，興味深い身体的表現活動につながる可能性がある。

学生は，造形的活動と関連させた身体的表現をする際の大切なことに自由をあげていた。しかしある程度のしばりがあったほうが，逆に自由に振る舞えると考えられないこともない。ダンス・カンパニー，コンドルズを主宰している近藤良平らが作った『うごきえほん』(14) という絵本がある。本であるから，すでに動きは決められている。今回の授業ではないが以前行なった時に，学生たちは楽しんで動いていた。絵本の指示通りに動くのだが，個人の動きは大切にされている。動きの組み合わせにプロとしての工夫が込められているからだろう。このような絵本も，本研究がめざしている造形的表現をきっかけにした身体的表現である。きっかけとは，「自由を生み出すしばり」である。次は，今回の実践について総合的に考えていきたい。

3. 実践全体の考察

まずこれらの実践が，どのような構造でできているかを考えてみたい。いずれの身体的表現も造形的活動をきっかけにしているのだが，前もってアイディアを出すための法則を作っていたわけではない。

「あたまかたひざぽん」は，もともとある遊び歌に感触遊びを付け加えたものだ。歌が先にあって何かを加えようとした。これの逆に，感触遊びが先にあって何か既成のもの，例えば遊び歌などを加える方法も考えられる。「まるさんかくしかく」は，当初は丸，三角，四角に切った色画用

紙を準備したいと考えていた。そうなると大きさや色の要素が大きく影響するため，アイディアがまとまらず身体のみで形を表現する形式に変更した。これも，もともとある遊び歌に造形的表現である丸，三角，四角という形を付け加えたものになっている。

「サイコロポーズ」は，造形的表現（であるサイコロに描かれた絵）をきっかけとした身体的表現である，と言えよう。これは，通常のサイコロとポーズを指示するための番号入り言葉カードでも成立する活動ではあるが，絵が描かれているサイコロを使用することで，子どもにとっては視覚的な面白味が増すだろう。また意外な組み合わせのポーズになることが楽しいポイントであり，笑いが絶えない活動になっていた。

「ジブリッシュ」は，絵を意味のわからない音声と身体の動きにする活動である。ただ，絵をよく描く人間にとっては，抽象的な線を描く際にも複数の表現ができるのだろうが，学生にとってはぐるぐる渦巻の延長線になってしまったかもしれない。その後の活動につなげるとしたら，まっすぐな線，くにゃくにゃの線，ぐるぐるした線，波線，点線，点々など，こちらが指示をして描いてもらった方がよかったのかもしれない。そうすれば，何種類もの身体的表現につながるからだ。また，会話もちょっと試すだけのもので終わってしまったが，それぞれ役割を決めて演じてみても面白かった可能性がある。先ほど「きっかけとは自由を生み出すしばりである」と述べたが，ジブリッシュの活動にはしばりが少なかったといえよう。

これらの実践を通してみると，きっかけである造形的表現をある程度はっきり決めることで，活動の可能性が広がることが分かった。最初は決められたことをしていて，工夫するポイントが最後にあるからこそ活動がしやすく，その結果として解放感を味わえ，より自由さを感じるのだろう。つまりある程度のしばりを造形的表現でつくることが安心して表現できることにつながり，それが身体的表現の可能性を広げていくというわけだ。ここまでみてきたように保育者が造形的表現をきっかけとした身体的表現の活動を考える場合，決められたことをする部分と工夫する部分とのバランスや順序がポイントになるといえよう。

Ⅶ　まとめ

本研究では，ウォーミングアップの「あたま かた ひざ ぽん」を除いて，3つの造形的表現をきっかけにした身体的表現の例を示すことができた。活動を考えるときは，アイディアの段階でゼロからスタートするのではなく，自分の馴染みのある活動をアレンジするか，自分のアイディアに馴染みのある活動を加えることが上手くいくコツだといえる。学生が子どもたちと行いたいと思ったアンケートにそのことが表れている。

例えば，Ⅲの「アートと身体的表現」で取り上げたアブラモヴィッチの向かい合うパフォーマ

ンスをアレンジすることもできる。子ども達が自分の自画像を持って向かい合って座り，相手と相手の自画像を見比べる鑑賞の活動である。お互いに人物と人物画を交互に見比べており，見比べている人とその人の描いた自画像がお互いの目に入っている。歌も加えることができるだろう。例えば，にらめっこの替え歌である。「みなさん，みなさん，見合いっこしましょ，勝ち負けなしよ，あっぷっぷ～」というような歌詞をつけ歌ってみるという展開だ。これは造形的表現をきっかけにした身体的表現といえるだろうが，単純なものではない。それでもこれを体験した子ども達は，今まで味わったことのない体験をする可能性がある。そしてこれは「子どもと表現」の中で，学生と取り組んでみても面白い活動になるだろう。このように，元々ある活動をうまくアレンジすれば，興味深い活動案を作っていけると考える。

ただ活動案の出し方として，何かをアレンジすることは楽しいアイディアにつながることが多いかもしれないが，逆にその考えに縛られて活動案が類型化していくリスクもあるかもしれない。

そもそも「子どもと表現」の中で，造形的表現をきっかけにした身体的表現の活動案を考えることになったのは，領域に関する科目が新設されることになったからである。しかしその背景には子どもの表現というものをもっと真摯に見ていってほしい，という切実な提案が込められているのかもしれない。そうすることで，保育者が接している子どものためになる活動案が生み出されると考える。

今後の課題としては，一度行なった活動を繰り返し行い，子どもたちからのフィードバックをもらい，活動を発展させていくことがあげられる。今回は，葉っぱや枝，光や影などの身近な自然を取り入れた活動をしなかった。そのことに加え，どのようなきっかけを作るかで，表現がどんな風に変わってくるかを調査するのも今後の課題としたい。

謝辞

本研究に協力してくれた，20C 初等科教育法（図工）選択者のみなさんに心より感謝します。

《注》

（1） 平田智久，2019,「子どもの造形表現の意味とその見取り」，笠原広一（編），『アートがひらく保育と子ども理解多様な子どもの姿と表現の共有を目指して』，東京学芸大学出版会，pp. 37-38

（2） 佐橋由美，2019,「乳幼児期の身体表現：乳幼児の発達理解と豊かな身体による表現を目指して表現の意味と乳幼児の発達を理解しておく意味」,佐野美奈・佐橋由美・田谷千江子（著），『乳幼児のための保育内容 表現：身体・音楽・造形』，ナカニシヤ出版，pp. 38-39

（3） 高原和子，2014,「子どもの身体表現」，瀧信子ほか（著），『乳幼児のための豊かな感性を育む身体表現遊び』，ぎょうせい，p. 34

（4） 新山順子・髙橋敏之，2017,「保育者養成における身体表現教育に関する研究の動向と課題」，『兵庫教育大学 教育実践学論集 第 15 号 2014 年 3 月』，pp. 79-87

（5） 新山順子，2011,「保育者養成における身体表現授業の学びと保育実践への有用性分析」，『岡山県立

大学保健福祉学部紀要 岡山県立大学保健福祉学部紀要 第18巻』，pp. 19-28
（6） あゆ's shop, 2021, Rakuten ラクマ，https://item.fril.jp/5f5647d6f14776b1371aa2b87a83ac5a,（2021年9月24日アクセス）
（7） たにかわしゅんたろう（著）・もとながさだまさ（絵），1977,『もこ もこもこ』，文研出版
（8） 徳嵩博樹，2014,「声を出して！全身で！楽しくあらわそう！」，中川 素子（編），『絵本ワークショップ（絵本学講座4)』，朝倉書店，pp. 120-123
（9） 中村英樹，2013,「パフォーマンス・アート」，末永照和（監修），『増補新装 20世紀の美術』，美術出版社，pp. 158-160
（10） 同上
（11） artpedia,2020年4月29日配信,「美術解説マリーナ・アブラモヴィッチ「パフォーマンス・アートのグランドマザー」，https://www.artpedia.asia/marina-abramović/,（2021年9月24日アクセス）
（12） 長谷川祐子，2014,「新たな系譜学をもとめて ── 跳躍／痕跡／身体」，野村萬斎・高谷史郎，・中田英寿・岡田利規・細馬宏通・岡本章・長谷川祐子（著），『新たな系譜学をもとめて アート・身体・パフォーマンス』，フィルムアート社，p. 185
（13） 伊藤丈恭，2015,『緊張をとる』，芸術新聞社，p. 350
（14） こんどうりょうへい作・かきのきはらまさひろ構成・やまもとなおあき写真，2021,『うごきえほん』，福音館

参考文献

平成30年度実施幼稚園教育要領，保育所保育指針，幼保連携型認定こども園教育・保育要領

（提出日：2021年9月24日）